資料渉猟余話

その75

歌集『伊那』（羇旅篇）資料から 中

飯田を懐かしむ『朝音』歌人、四賀光子

鎌倉貞男

四賀光子（一八七六～一九七八）は、歌人・国文学者で歌誌『潮音』を創刊主宰した太田水穂（一八七六～一九五五）の夫人である。夫婦共に飯田とは繋がりが深く、高森町や龍江に歌碑がある。

アララギ派歌人が当地歌壇の主流勢力を占める以前、大正中頃の峡谷歌壇は『潮音』の会員や歌人が多かった。そのため、水穂は大正八年より伊那谷に何度も来峡し、郡内の青年たちに大きな影響を与えた。

光子は幼少の頃、下伊那郡視学となった父有賀盈重に伴われて来飯した。最初桜町に、次に松尾に約二年間居住し、飯田小学校に通学した。明治四十二年、東京女子高等師範学校卒業後水穂と結婚し、『潮音』の有力同人として夫を扶けた。

そうしたことを知る標題資料の所蔵者だった今村良夫は、この二人に歌集『伊那』（羇旅篇）の出詠歌を依頼した。その際、既刊の歌集『伊那』（現代篇）を贈呈しながら丁寧に頼んだ。

以下はその返事である。

御骨折りの御歌集伊那頂だいいたしありがたく存じます。装幀も用紙も今時には珍しいまでに立派にて結構な御本でございます。忘れた旧知の方々の御歌も沢山入りをり、大変になつかしく拝見いたしました。…水穂も大変たのしんで拝見いたしました。青山・大井・宮崎・白鳥等

文中の青山は青山榛三郎（一八九三～一九七三）、大井は大井廣（一八九三～一九四三）、宮崎は宮崎茂（一八九〇～一九七八）、白鳥は白鳥義千代（一八九一～一九六三）である。いずれも当時下伊那にいた『潮音』の有力同人で、後の古き同人のいた頃の下伊那は、実に親しい感じがいたしたものでした。窪田一二三氏や今村邦夫氏等は今も惜しい歌人だと思ってをります。

（昭和25年2月13日付書簡）

年、斯道に精進し、大きな業績を残した。また、窪田・今村は、それぞれ『夕樺』同人から『潮音』社友になった、龍江・川路在住の歌友である。

その半年後、飯田に住んでいた頃を思い出して作歌した光子から今村へ、以下の文を添えて六首の歌が贈られてきた。

…私は尋常四年になる時、四月に母と弟二人と友に飯田にまいり、はじめ桜町といふ町のある商店の裏の隠居所をかりていましたが、まもなく父が松尾村へ居を移しました。その時、母が田舎住をいやがったことを覚えています。私は十二才の四月松本へ移りました。…御要望によって作ってみましたがたいしたものも出来ず、御恥ずかしいものですが、御役にたちましたら御入れ下さい。…私の父母は、どこよりも下伊那を好いて居りましたので、私もいつも懐かしく思って居りますが、つい折がなくて参れません。

（昭和25年8月16日付書簡）

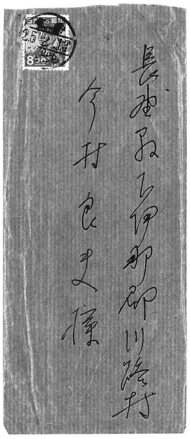
この手紙から飯田を懐かしむ女史の気持ちがいたいほど伝わってくる。その時寄せられた短歌の中から、一・二首を選んで次に紹介する。

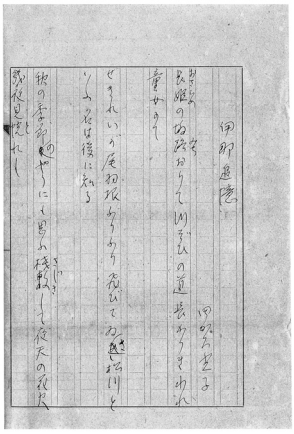
長姫の坂道おりて川ぞひの道長かりきわれ童女にて

ねんごろにありし伊那人を亡き母が常いひましき今に忘れず

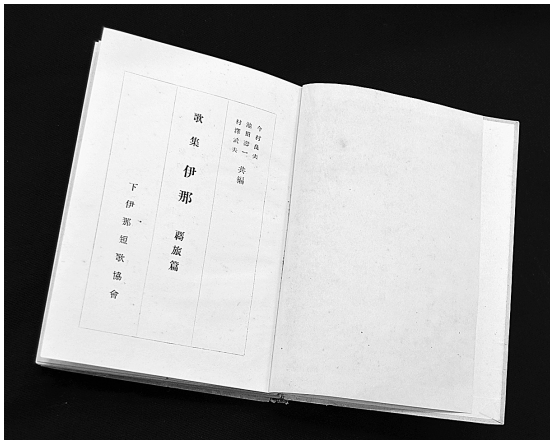
一部に、これら六首を光子が来飯した昭和三十八年の作とする説もあるが、それは誤りで、正しくはこの時、右に述べた経緯で作られたものである。

（故人敬称略）





四賀光子からの来信（歌稿）



標題の歌集『伊那』（羇旅篇）